

“にれのき”は、エルムアカデミーが、父母・OB・サポーターに向けて発信する、情報誌です。



# にれのき

2003年1月号



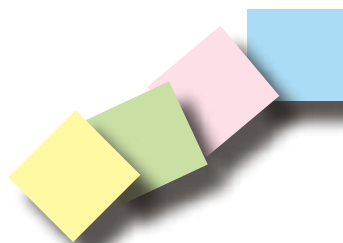
## 特集

『よのなか』を学ぶ子どもたち

小学部特別カリキュラム後期実践報告

エルムの新たな方向性を探して

関西研修・視察ツアー報告



# 『よのなか』を学ぶ子どもたち



## 小学部特別カリキュラム 後期実践報告

特別カリキュラム(特カリ)を一言でいえば「やりたいこと・興味あることをトコトン追究する総合の授業」です。5月の「料理コンテスト」に始まり、8月のキャンプでも、子どもたちの「やりたいこと・興味あること」から出発して、さまざまな企画を実現してきました。

二期の特カリは、時間も場所も内容もまったく白紙の状態からスタートしました。夏のキャンプで自信がついた子どもたちから、ポンポンとユニークなアイデアが飛び出します。子どもたちの話し合いの結果、荏原教室の4・5・6年生たちは「屋台を開店し、その利益を使って旅行へ行く」、立会教室の4年生は「自転車修理の技術を身につけて、資金をためて、自転車旅行へ行く」ということになり、すべてのクラスが「親子もちつき」に出店することになり

ました。(詳しい経過はエルムのHPをご覧ください)



■ 「よのなか」との関わりで学びはじめる子どもたち

もたちは一喜一憂しながらも、ひたすらたこ焼きのことを考える日々が続きました。

最初は一人の思いつきでスタートした「たこ焼きプロジェクト」ですが、近くにあるたこ焼き店を五件調べてをし、「どうすれば美味しいたこ焼きが作られるか？」という真剣な探究が始まりました。そのためは、何としてもお店の技を盗みたい。子どもたちは、たこ焼きをつくっている店員を食い入るように見つめ、聴かずかきながら自分たちの考えた質問を店員にぶつけました。キチンと対応してくれる店員や励ましてくれる大人もいれば、ほとんど相手にしてもらえない店もあり、子どもたちは、たこ焼きをやることになった6年生は、鶏肉卸業者に鶏をさばっている様子を見学に行き、実際に現場の職人から鶏のさばき方を習いました。



初めて接する地域の大人たちとのコミュニケーションに戸惑いつつも、子どもたちが得た貴重な体験や知識、そして人との出会いなど、肌で感じた「よのなか」との関わりは、子どもたちにとって新鮮な「学び」



であったと思います。

■ 「本物の学び」の実感と「仲間づくり」へ向けて

算数や国語の授業などでは、ともすると大人の側の「都合」や「学ぶ意義」を出発点に子どもに働きかけるといふことになりがちです。しかし、エルムの特カリは、こうした通常の「学びの関係」をひっくり返して、子どもたちの興味や関心から出発するという授業をめざしています。

す。こうした逆転の発想から「学び」を出発させ、自らが主人公となった子どもたちは、「よのなか」との関わりへ積極的に進んでいきます。こうした取り組みを通して、子どもたちが「本物の学び」を実感できることが、私たちの願いです。そして、こうした取り組みを通じて、子どもたちに新しい仲間関係を生みだし、より豊かな集団づくりへつなげていくことを大切にしたいと思っています。



きのくに子どもの村学園小学部校舎を校庭から撮影

# エルムの新たな方向性を探して

## 関西研修・視察ツアー報告 その1

エルムでは、創立当初から教育実践の質を高めるために、様々な機会を設けて研修に力を入れてきました。今年度、専任教員の入替えや新人教員の教育を考慮して、「授業見学」「授業検討会」などの研修を週一回のペースで重ねてきました。

また、十二月四日～九日の六日間、専任教員3名を含む6名の教員で関西へ施設見学や各地の実践を見聞する研修を行ってきました。

今回の研修の目的の一つは二十年に及ぶエルムの実践を振り返り、エルムの今後のあり方を展望するために、福祉と教育を結合させて実践している和歌山の「麦の郷」、大阪の「石井子どもと文化研究所」を見学すること。二つ目は大阪で開催された「子育て文化協同全体集会」に参加し、全国各地の実践を学ぶこと。特に教育NPOに関しての学習を深めること。最後に小学部の特カリの実践と



“工務店”プロジェクトでの家づくり

結びつけて、ユニークな教育実践で知られている「きのくに子どもの村学園」のプロジェクト授業の参観をすることでした。

十二月四日、夜十一時。エルムを発ち、東名・名神高速を夜行で走り、翌日の五日、午前八時、最初の目的地、和歌山県橋本市の「きのくに子どもの村学園」に到着しました。高



“ガーデニング”プロジェクトでの話し合い



ハートフルハートのスタッフの方との懇談

不登校の子どもの居場所「ハートフルハート」(ログハウスの建物)は自立支援の一貫として八年前から運営をしています。昨年の九月からは引きこもりの青年の自立支援センターとして「エルシティオ」を開設しました。それぞれの施設は独立して和歌山市内と近郊に分散して設置されています。多くの施設は障害者作業所と認定され、市からの補助金

と各施設の収益で事業を展開していますが、福祉切り捨ての政策の中で、補助金カットも多く困難な状況もできています。(中塚 レポート)

不登校の施設である「ハートフルハート」は福祉的な発想から「居場所」という位置づけのようでした。麦の郷グループという大所帯の利点を生かして、いろいろな「大人」や「現場」を利用することができることはうらやましい限りです。やりたいことが、ほぼグループの中のどこかにあるという利点をうまく生かしてい

野山の隣に位置し、山深い過疎の村の「こんなところに本当に学校があるのか」という場所に学校がありました。

午前十時から、簡単なレクチャーを受けた後、小学生の四つのプロジェクト(授業テーマ)、中学生の三つのプロジェクトなどを参観し、校舎や校庭、様々な取り組みの展示物などをじっくりと見学しました。(大谷 レポート)

普通の学校に通っていたらできないような体験をたくさんしていました。生活や授業の中で身体や頭をいつも目一杯使っているので、子どもの持つエネルギーが正常な形で発散されているように感じました。エルムの子どもたちの多くが、エネルギーをエルムでしか発散できない状況を思うと、「きのくに」のような環境がどの子にもあればいいと思いました。

やりとりを見ても柔らかい感じで、歪んだ表情やきつい顔つきなどもしていません。色々なことで悩んだり葛藤して、曲がったりとんがったりしている子どもたちをエルムで見ているので、不思議な感覚を受けました。

翌六日、和歌山市とその近郊に数多くの施設を持つ「麦の郷」を見学しました。約二十五年前、障害者の共同作業所から出発し、事業を次々と拡大、全国初のクリーニングと印刷の福祉工場を作ったり、製パン工場、パン店、精神科のクリニック、精神障害者の自立支援センターなど二十以上の施設を運営しています。不登校の子どもの居場所「ハートフルハート」(ログハウスの建物)は自立支援の一貫として八年前から運営をしています。昨年の九月からは引きこもりの青年の自立支援センターとして「エルシティオ」を開設しました。それぞれの施設は独立して和歌山市内と近郊に分散して設置されています。多くの施設は障害者作業所と認定され、市からの補助金



引きこもり青年支援共同作業所「エルシティオ」外観

るようでした。しかし、補助金で運営している部分（特に人件費）については現在の状況のもとでは難しい気がしました。

麦の郷本部は、クリーニング、印刷、製本、製パンとふつ々の企業のような工場でかなり大規模に展開していることに驚きました。ビジネスとして企業と対等に渡り合うための工夫を数々している様子ですが、こちらもかなり難しいものがありそうです。自立をサポートするためには、単に職業訓練だけでなく、生活するための基本的な能力についても総合的にサポートしている点は、とても感心しました。

昨年九月にオープンした「エルシテイオ」は引きこもりの青年のための作業所と、コーヒー豆を輸入し焙煎して販売するという発想がユニークでした。プロジェクトはまだまだ不十分ですが、あれだけの施設（一軒家を新築）と、思いを形にする行動力はすごいと思いました。

七日は大阪市西区にある「石井子どもと文化研究所」を訪れました。



石井子どもと文化研究所代表の石井守さん。

懇談の中で石井さんが言った「フリースクールでもカウンセリングでも、実績を追い求めてしまうと、どうしても結果を急いで、子どもたちにいい影響を与えない」という言葉が印象に残った。

ここは十五年ぐらい前から不登校の子どもたちの相談にのり、受け入れてきたところです。居場所としてだけでなく、七年前からは障害者の作業所作りと連動して、不登校の子どもたちの働く場を確保したりしてきました。ここも、和歌山と同じく昨年九月に引きこもりの青年たちの自立支援センターとして「ノール阿波座」を開設しました。表通りに面した4階建てのビルをまるごと借り切り、印刷企画会社と協力して、青年

たちにパソコンの指導と働く場そして居場所を提供しています。引きこもりの支援ということでは、大阪で初の取り組みということもあり、新聞をはじめマスコミに大きく報じられています。

（矢沢 レポート）

前日の和歌山「エルシテイオ」と比べると、大阪での活動は障害者福祉というより青年の雇用に重点をおいた考え方をしているようだ。また、引きこもりや不登校の青年を福祉作業所の指導員に採用し社会復帰させる成功例は、地域で生きてきた青年を、地域で雇用する観点として大切なものを感じる。エルムでも来年度に向けて、青年の雇用拡大をはかるプログラムを作る上で大いに参考になる。

関西の人たちは、このような活動を立ち上げるのが素早い。「向こう見ずでやっているんです」との言葉であったが、地域の多くの人を巻き込んでこのようなものをつくりあげるやり方は今後大いに学んでいきたいと思っている。

# 若手教員の リレーエッセイ

## 第1回 宮下 哲 (中学部)



ならず二度三度とありました。

私はエルムに来るまでは、まともに「自分を見つめる」ということができませんでした。しかし、実際に子どもたち一人ひとりの成長に寄り添うことは、今までの自分を真剣に見つめなおし、自分自身を変えることでしか実現できないと痛感

私は、学校教師を目指して

いました。そういったこともあって友人の紹介でエルムのアルバイトを始めました。しかし、現実の子どもたちを前にして、最初は全てがうまくいかず、苦難の連続でした。エルムの専任教員や、同僚のアルバイトの教員に指摘され、泣きながら自分の実践の反省をしたことが、一度

自分も同様です。自分自身に真剣になることで、「自分もまんざらじゃないな」と自分のことが好きになり、「もっと自分の可能性を広げたい」と思えるようになります。

エルムにはその挑戦を、温かく、且つ厳しい目で見守ってくれる仲間そして子どもたちがいます。時に励まし合い、時に刺激し合い、時に評価し合う。そうした仲間や子どもたちがいるエルムで、私はこれからも自分を成長させ続けながら、働いていきたいと思っています。

私たちエルムアカデミーは、一貫して地域との結びつきを大切にしてきました。

それは、とりもなおさず、私たちが日々向き合っている子どもたちは地域で生まれ、そして地域で育つからです。豊かな文化と、人間の血の通った結びつきのある地域で育つ子どもは、必ず地域に帰ってきます。そして、地域をつくり、変革していく担い手となっていきます。

そうした有機的で発展的な環流の、ひとつの大きな拠点でありたいと私たちは強く願っています。

エルムのめざす、「人間を育てる」教育は、教室のただでで完結するよう、な平面的な教育ではなく、地域とコミュニケーションすることで厚みと深みがある、立体的な教育です。

地域に生まれ、  
地域に育ち、  
そして地域をかえる。  
それが私たち  
エルムアカデミーです

エルムができて十九年。創立年に生まれた子どもたちがいよいよ成人となる日も近づいています。私たちは、間もなく地域社会の担い手となる彼らとともに、そして手を携えるすべての地域の人々とともに、子どもたちの育つ地域をこれからもつくりまします。

# 燃やせ！闘志と体脂肪！

毎年恒例のスポーツ大会。12月22日、平塚中学校体育館で開催されました。

今年も多くの中学生・高校生が参加して、クラス対抗によるバレーボール・バスケットボール、そして、全体レクリエーションと盛りだくさんの内容のなか、子どもたちも教員も、みんなで気持ちのいい汗をかきました。



また、スポーツ大会は、日常ではなかなか顔を合わすことのないクラス・学部を越えた中高生の交流の場

この冬期スポーツ大会は、エルム実践の核となる「クラスづくり」の大きな柱になる行事です。2学期が終わるこの時期に、スポーツ大会に向けてクラス単位で取り組むことで、夏合宿からこれまでのクラスの歩みをいったん確認し、1年間を締めくくることとなります。そして、更によりよいクラスへとつなげていくことを目指していきます。



また、スポーツ大会は、日常ではなかなか顔を合わすことのないクラス・学部を越えた中高生の交流の場

としても位置づけています。スポーツ大会当日は、中学部、高校部・昼間部がそれぞれに分かれて、クラス対抗によるバレーボール・バスケットボールをおこない、熱戦が繰り広げられました。中学部では3Aが「さすがはエルマー」といわんばかりの固い団結力を示して、見事に両種目とも制覇しました。高校部・昼間部は、高2クラス、高3クラスがそれぞれ優勝しました。また、スポ大の目玉である高校生の手づくり企画による全体レクは、笑い悲鳴と歓声に包まれ、中高生の絆を越えたエルムらしい一体感が生まれました。



た。エルムの中高生パワーに包まれた、大いに盛り上がった一日となりました。